

33 東海道を往く異国人たち

～ケンペル・シーボルトの見た東海道～

1 VOCの幕

江戸時代、多くの旅人がゆきかった東海道。旅の起点はむろん「お江戸日本橋」である。その近くの本石町ほんごくちようにオランダ人の定宿があった。「長崎屋」といい、店先にはオランダ東インド会社の紋章であるVOCの幕が張られていた。そこには、オランダ商館長や付属の医師らが宿泊したため、多くの文化人がここを訪ねている。蘭学をリードした杉田玄白すぎた げんぱく、青木昆陽あおき こんよう、平賀源内ひらが げんないらである。

通商を認められたオランダは、毎年1回（1790年以降は5年に1回）将軍に挨拶をするという江戸参府さんぶが恒例となっていた。参府は217年間で168回にのぼる。長崎から江戸までの日数はおよそ90日前後で総勢50人ほどの行列が街道をいろどった。ちょっとした大名行列である。

一行の旅の様子は、オランダ商館医として旅に随行したドイツ人ケンペルとシーボルトがそれぞれ、『江戸参府紀行』という旅行記に残している。ケンペルは1691（元禄4）年2月に、シーボルトは約130年後の1826（文政9）年2月に、それぞれ長崎を旅立った。2人とも医師であり、自然を幅広く扱う博物学者でもあった。もっとも、薬品は自然界から求めざるを得なかったこの

時代には、これらの学問の境界線はあいまいだった。

彼らが記録した県内の東海道での旅の様子を、以下にスケッチしてみる。

2 川留中の化学実験

2人の記録に共通することは、130年の時空をへだてているのに街道沿いの様子は大きく異なることである。ただ、旅先の同じ場所でも視点が異なり、おのずとタッチが変わり興味深い。〈史料1〉〈史料2〉は2人が初めて見た富士山の光景である。シーボルトはより科学的に富士山を捉えようとした。オランダ商館医は日本研究の任務を強く負っていたからである。帰国後ケンペルが『日本誌』（2巻）、シーボルトが『日本』（22巻）という研究書を刊行している。富士山の観察の差違は、2人のパーソナリティーから発信されただけでなく、ケンペルより1世紀以上へだてたシーボルトの時代が、より詳細な日本研究を求めたからではないか。

〈史料1〉
その姿は円錐形で左右の形が等しく、堂々としていて、草や木は全く見えないが世界中で一番美しい山というのは当然である。〔中略〕少なくとも一番高い山にはいつも雪が積もっている。
（斎藤信記『ケンペル江戸参府紀行』より）

〈史料2〉
この山の高さを測るためバロメーターを充填した。〔中略〕繰り返し観測した結果五〇度の温度で二六秒下がった。ピュルガー君は沸騰している湯で試して、その沸点が三度だけ低いことが判った。フンボルトの計算によればこれは三千フィートの高度を示すものだ。
（斎藤信記『シーボルト江戸参府紀行』より）

ケンペルは街道で出会う乞食こじきや歌をうたう比丘尼びくに、ホラ貝をうるさく吹く山伏やまぶし、そして奥州からきた伊勢参りの少年など、シーボルトに比較すると細かい人物描写をしている。彼が歴史や哲学といった人文科学に精通していたからであろうか。

一方、シーボルトは、道々で出会う植物や鳥類・魚類の名前、はたまた鉱物名を記し、剥製まで購入している。また、温度計で気温を測定するといった気の入れようである。宇津ノ谷では「ハナイカダ・クロモジ・ミヤマシキミや初めて見るような気がする若干の属が私の調査の対象となった。ここではタヌキの一変種を手に入れ、ヨーロッパのとはかなり異なるモグラを捕らえた」と書いている。こうした研究成果は帰国後『日本植物誌』や『日本動物誌』など図版入りの研究書として結実する。ここで見たハナイカダも『日本植物誌』に載せている。シーボルトはこの書の覚え書きで「…山間の住民が若葉を野菜として利用し、葉上に花を持つ珍しい植物で、花を載せた葉を筏にたとえたことからこの和名がある」と述べている。

また、彼は興津川で川留にあった時、採集物を整理中に訪問した役人に〈史料3〉のような化学実験をする。なおこれらの実験の化学反応は①では液体中でアワが発生し、赤褐色に濁り、②では褐色の沈殿物が発生するそうである（化学教員の御教示による）。役人は、マジシャンのようなこの実験にさぞ驚いたことだろう。

シーボルトは、日本人の器用さにも注目している。東海道由比の倉沢村では、ミツマタでつくられる紙漉の技術をつぶさに観察し、ヨーロッパの製紙業と比較し次のように結論づけている。「日本では製紙の簡単なことが、ヨーロッパにおける煩雑な工場と較べて著しい対照をなしている。日本における紙の消費量は、紙が簡単にできるために一般に普及している製紙技術によってのみ可能になるのである」。彼の日本研究は、日本人の民族性や心性にも及んだ。

3 シーボルト事件

シーボルトの日本研究は、必然的に日本人の手を借りることにもなった。それは長崎郊外に設けた鳴滝塾の学生に、レポートを書かせ調査の材料にしたことからわかる。そうした日本人とのかかわりが彼の運命を変える。1828（文政11）年8月に起こったシーボルト事件である。一時帰国するシーボルトの船ハウトマン号の積荷から、御禁制の日本地図や葵の紋の羽織などが発見され、彼は国外追放となった。

その後、ドイツで出版されたシーボルトの『日本植物誌』は世界初の日本植物図鑑となった。そのなかに紹介したアジサイ16種の一つを「ハイドラングア・オタクサ」として、愛妻の「たき」の名を学名としたことは著名である。また、彼の大著『日本』を丹念に読んだペリーは、日本の鎖国のとびらを開けることになる。シーボルトの江戸参府は、日本研究に大きな影響を与えたのである。

〈参考文献〉

- 斎藤信訳『ケンペル 江戸参府紀行』（平凡社東洋文庫）
- 斎藤信訳『シーボルト 江戸参府紀行』（平凡社東洋文庫）
- 大場秀章監修『シーボルト 日本植物誌』（ちくま文庫）

〈史料3〉

「とくに彼は試薬による二三の化学実験に驚いていた。われわれはわざわざ鉄にシアン化水素酸を、石灰水に硝酸銀（水溶液）を加える実験を行った。彼は帰る時に、どうぞ貴下が今日少しでも安らぎと休養をもたれるようにと挨拶を述べたので私はこれに対して、日本の川のお神にお礼を申さなければと答えた。」

（斎藤信訳『シーボルト江戸参府紀行』より）